

# 複合動詞の普遍的・個別的基盤の一考察： 日本語、韓国語、英語の対照言語研究\*

山 田 昌 史

A Comparative Analysis of Compounding Verbs in  
Japanese, Korean and English

Masashi YAMADA

2017年9月7日受理

## 抄 録

本稿は日本語の複合動詞研究の知見（寺村(1984)、影山(1993)、松本(1998)、影山(2013)等）をもとに韓国語の複合動詞を分析する研究（生越(1984)、塚本(2009, 2013)、徐(2010)等）を取り上げ、日本語と韓国語の複合動詞の分布の違いについて考察し、さらに英語の複合動詞の事実を含めて、三言語間にみられる言語差がどのような理論的枠組みから説明されるのかについて考察した。日本語の複合動詞は影山(1993, 2013)により、2つに大別できることが示されたが、韓国語では、塚本(2009)によると、その一部しか複合動詞として生成されない。また、英語では例外的な構文的な表現を除いて、複合動詞の形成ができない。このような言語差はアスペクト的要素をどのように具現化するのかの個別的特徴から導かれると仮定して、複合動詞の派生に関する形態統語論からの分析の可能性を示した。

キーワード：複合動詞 日・韓・英対照言語学 動詞のアスペクト特性  
言語の普遍性と個別性 形態統語論

## はじめに

本稿は、これまで広く議論されてきた複合動詞について、日本語、韓国語、英語の3つの言語を比較しながら、それらを生成する普遍的な規則と個別言語の違いを導き出すメカニズムを明らかにすることを目的とする。日本語には多様な複合動詞が見られることはこれまで多くの先行研究によって明らかにされ、それらを分類する優れた研究がこれまで多くなされてきた（cf 寺村(1984)、影山(1993)、松本(1998)、影山(2013)

\*本稿は、2015年度後期の「常葉大学静岡キャンパス授業公開 Week」において、谷誠司先生の「対照誤用分析（日韓）」を聴講した際、授業で取り上げられていた日本語と韓国語の違いから着想を得たものである。この論文を執筆するきっかけを作ってくださった谷誠司先生に附して感謝申し上げる。

等)。本稿では、これらの分析を概観するとともに、これらの研究をもとに韓国語の複合動詞に関する研究（生越（1984）、塚本（2009, 2013）、徐（2010）、崔（2016））に注目して日本語と韓国語の複合動詞の生成にはどのような振る舞いの違いがあるのか、明らかにする。また、英語については、Pullum（1990）、Bjorkman（2010）らの研究によって、特異な振る舞いを示す複合動詞が存在することが明らかにされている。

本稿では、基本的には日本語の複合動詞に関する分析をもとに、その他2つの言語の複合動詞について考察していく。日本語の複合動詞については、影山（1993）によって統語的複合動詞と語彙的複合動詞が存在することが明らかにされ、さらに影山（2013）によって語彙的複合動詞は、従来の意味的關係による分類（松本（1998）、由本（2005）等）をさらに一般化して2つの分類、つまり、規範的複合動詞とL-asp複合動詞に分けられることが示された。そして、影山の分類をもとに韓国語の分析を行った塚本の一連の研究（塚本（2009）、塚本（2013）等）により、影山（2013）の分類に従って、韓国語では規範的複合動詞のみが生成可能で、その他の2つの複合動詞のタイプは生成できないことが明らかにされた。

さらに、英語においては、一部の口語表現において、動詞を連結させて日本語の複合動詞と同じ形式をとるものがみられる。しかし、その分布は非常に限られ、単一の動詞と同じような文法特性（主語との一致や時制を持つこと）ができず、常に原形で生じる。また、連結できる動詞のタイプが限定されている。このことから、英語では、基本的には動詞を複合できず、日本語の複合動詞を表す事態は英語では他の文法形式で表すといえる。

このように、日本語、韓国語、英語の3つの言語では複合動詞の形成に言語差がみられる。このような言語的な違いはどのような文法メカニズムから生じるのか、また、その理論的基盤はどのようなものなのかを追究することが本稿の目的である。特に日本語では、後項動詞にアスペクト的意味を持つ動詞が生じることができるが、韓国語ではそれが不可能であることに注目する。そして、複合動詞の形成に言語的な違いが生じるのは、アスペクト的意味を持つ形態要素がどのように主動詞が表す事態と共に言語化されるかという点に収斂すると分析して、日本語、英語、韓国語にみられる言語的違いを生じるメカニズムを提案する。

本稿の構成は以下である。次節では、日本語の複合動詞の分類について議論する。2節、3節ではそれぞれ、韓国語、英語の複合動詞について先行研究をもとにその振る舞いを観察する。そして、4節において、日本語、韓国語の複合動詞生成可否は語と節、文との合成をどのように行うかという文法メカニズムから生じると提案する塚本（2009）、塚本（2013）を検討して、さらに、英語の複合動詞の事実を含めて考察して、複合動詞生成に関する個別言語の違いを導く理論的枠組みを提示する。

## 1. 日本語の複合動詞

本節では、日本語の複合動詞の分類（寺村（1984）、影山（1993）、松本（1998）、影山

(2013)) について4つの先行研究を概観する。

### 1.1. 寺村 (1984)

寺村 (1984) は、複合動詞を形成するそれぞれの動詞が単独で使われる際の意味や文法的特徴を、複合動詞が形成されても保持しているか否かの観点から、複合動詞を4つに分類している。例えば、以下のように複合動詞を形成する2つの動詞がそれぞれ独立した動詞として文法的な文を生成する例がある。

- (1) a. 虫を握りつぶす。
- b. 虫を握る。
- c. 虫をつぶす。

(1a)の「握りつぶす」を形成する2つの動詞は、(1b)と(1c)のように単独で文を形成できる。その一方で、前項動詞は単独で文法的な文を形成できないが、後項動詞はできるものがある。また、その逆の複合動詞も存在する。

- (2) a. 書類を差し出す。
- b. \*書類を差す。
- c. 書類を出す。
- (3) a. 雨が降り出した。
- b. 雨が降った。
- c. \*雨が出した。

さらに、「(国有地を) 払い下げる」「(話を) 切り上げる」などでは、前項、後項、いずれにおいても、それらが単独で使われる際の独自の意味を複合動詞内で保持しておらず、複合動詞全体で語彙の意味を形成する。

このような事実から、寺村 (1984) は、複合動詞はそれを形成する前項、後項の統語的、意味的な独立性の観点から4つに分類できるとしている。

- (4) a. V-V: 呼び入れる、握りつぶす、殴り殺す、ねじ伏せる、出迎える、…
- b. V-v: 降り始める、呼びかける、思い切る、泣き出す、…
- c. v-V: 差し出す、振り向く、打ち樹てる、引き返す、…
- d. v-v: 払い下げる、(話を) 切り上げる、(仲を) 取りもつ、(芸を) 仕込む  
          とりなす、… (寺村 (1984) : 167)

(4)で、大文字で記されたものは、それが本来的な動詞の意味を複合動詞を形成しても、それが引き継がれていることを表し、小文字で記されているものは、複合動詞内ではその本来的な意味を失い、独自の意味を持つことを表している。このように寺村 (1984)

は、複合動詞は複合動詞形成前後で本来的な意味的成分を保持するか否かで、分類できることを示した。

次節で、本節の寺村の分析を発展させた影山(1993)の提案を概観する。

## 1.2. 影山(1993)

影山(1993)は、前節で述べた寺村(1984)の複合動詞の形態的な独立性からの4分類について必ずしもうまく分類できない事実(押し込む、流し込むなど)を指摘して、複合動詞に統語テストを行うことで、複合動詞は2つの種類、つまり、統語的操作を許す「統語的複合動詞」とそれを許さない「語彙的複合動詞」に分類できること、加えて、2つのタイプの複合動詞がそれぞれ別の派生部門で形成され、異なる統語構造をもつことを提案している。

影山(1993)は、複合動詞の前項が「そうする」で置き換えることができるかどうかについて観察している。

- (5) a. 遊び暮らす→\*そうし暮らす、押しあける→\*そうしあける  
b. 調べ終える→そうし終える、秘密をしゃべりまくる→そうしまくる  
(影山(1993):80)

(5a)の2つの複合動詞は前項要素が「そうする」で置き換えられないのに対して、(5b)のそれらは、それが可能である。

また、以下のような主語尊敬化の事実も、上の(5)と同様に2つの異なる振る舞いを示す。

- (6) a. ノートに書き込む→\*お書きになり込む  
手紙を受け取る→\*お受けになり取る  
b. 歌い始める→お歌いになり始める  
しゃべり続ける→おしゃべりになり続ける  
(影山(1993):84)

さらに、前項動詞の受動化についても文法性の違いが見られる。

- (7) a. \*書かれ込む (cf. 書き込む) \*押され開く (cf. 押し開く)  
b. 名前が呼ばれ始めた、愛され続ける、殺されかけた  
(影山(1993):87)

この他にも、前項に「サ変動詞」が生じることができるか、前項が「飲み飲む」のような重複動詞となれるかどうか、を加えて5つの統語テストによって複合動詞を2つに分類している。上記の統語テストで全て非文を生じるものは統語的性質を持たないことから「語彙的複合語」と呼ばれ、代表的な例として(8a)が挙げられる。一方、上記のテストで全て文法的となり、統語的特徴を示すものは「統語的複合語」と呼ば

れ、(8b) が代表的なものである。

- (8) a. 飛び上がる、押し開く、泣き叫ぶ、売り払う、受け継ぐ、解き放つ、…  
b. 払い終える、話し終る、しゃべり続ける、食べ過ぎる、食べそこなう、…

(影山 (1993):75-76)

そして、統語的複合動詞は統語構造に別々に導入され、統語部門で合成されるが、語彙的複合動詞は語彙部門において形成され、統語部門にはひとつの動詞として導入されるとし、2つの複合動詞のタイプが別々の言語部門によって生成されることを提案している。また、影山 (1993) は、語彙的複合語において複合可能な動詞のタイプの組み合わせは、両者の他動性が一致するもの（他動詞+他動詞、非能格+非能格、非対格+非対格、非能格+他動詞、他動詞+非能格）であることを観察し、これを「他動性調和の原則」（影山 (1993): 248) として提案している。

次節では、影山 (1993) の語彙的複合語について意味的な分類を試みる松本 (1998) を概観する。

### 1.3. 松本 (1998)

松本 (1998) は、影山 (1993) の語彙的複合動詞について、前項、後項の意味的關係から複合可能な動詞のタイプを考察している。松本が観察する前項と後項の意味關係は以下のようにまとめられる。

- (9) a. 前項が後項の手段を表すもの：押し倒す、たたき落とす、打ち上げる、…  
b. 前項が後項の様態・付帯状況を表すもの：駆け登る、流れ落ちる、…  
c. 前項が後項の原因を表すもの：降り積もる、おぼれ死ぬ、泣きぬれる、…  
d. 前項を意味的主要部とするもの：咲き誇る、踊り狂う、言い差す、晴れ渡る、…  
e. 前項が後項の背景的情報を表すもの：食べ残す、取り残す、売れ残る、…

このように、松本は意味的観点から語彙的複合動詞を分類した。また、松本は影山が語彙的複合動詞を形成するそれぞれの動詞には前節で述べた他動性調和の原理が働くとの提案をその反証例から問題点を指摘し「主語の条件」という別の条件によって語彙的複合動詞とそれと共に生じる項の關係が捉えられることを主張している。

前節と本節の2つの提案から明らかになったのは、日本語の複合動詞は、(i) 語彙的複合動詞、統語的複合動詞の2つに分類でき、それぞれが派生される部門が異なること、(ii) 語彙的複合動詞はそれを構成する2つの動詞が意味的關係を持って結合していることが明らかにされた。

次節では、これらの分析に基づきながらも分類を若干修正した影山 (2013) について概観する。

#### 1.4 影山 (2013)

影山 (2013) は、統語的、語彙的複合動詞のうち、語彙的複合動詞についてこれまでの提案 (影山 (1993)) を再分析し、語彙的複合動詞の中にもいくぶん統語的特徴を帯びた要素 (アスペクト性) をもつものから成り立つものがあるとして分類を修正している。

前節で松本 (1998) を概説した通り、語彙的複合動詞は前項、後項の意味的關係から分類できるが、影山 (2013) は「手段」「様態」「原因」「並列」「補文関係」「副詞的」の6つの意味關係をもとに分類 (影山 (2013): 286) している。その中で、「補文関係」と「副詞的」な意味關係を持つ2つの種類の語彙的複合動詞は残りの4つのタイプとは明らかに異なる性質を持つことに注目して、影山 (1993) の分析を修正する。

以下の例をみてもみる。

- (10) a. 見逃す、編み上げる、死に急ぐ、聞き漏らす  
 b. 晴れ渡る (= すっかり晴れる)、使い果たす (= 全部使う)、  
 居合せる (= たまたま同じ場所にいる) (影山 (2013): 286)

(10a) は、補文關係を表すものに分類されるものだが、「V1 という行為 (出来事) を / が V2」と言い換えられ、統語的複合動詞のように振る舞うものの、統語テストによって語彙的複合動詞に分類されるものである。また、(10b) は副詞的と分類されるもので、これらは後項要素が前項要素を副詞的に修飾するものである。これら2つのタイプの語彙的複合動詞は、後項要素が寺村 (1984) が分類した本来的な意味を失っているもの、いわゆる補助動詞的な働きをしているという共通の特徴をもつ。そして、これらの後項要素は、広義のアスペクト (これを影山は Lexical-aspect (L-asp) と呼ぶ。) を表す補助動詞であるとして、これを後項要素にとる複合動詞を「L-asp 複合動詞」と呼ぶ。一方、前項が後項の「手段」「様態」「原因」を表すもの、2つが「並列」關係にあるものなど、従来の語彙的複合動詞を「規範的複合動詞」と名付けている。加えて、規範的複合動詞は前項と後項動詞が自立語で2つの同じ範疇のものが複合しているが、L-asp 複合動詞は後項に機能的な範疇をもつ L-asp を複合するとして、それぞれが別の形態構造を持つと分析している。このことで、これまで6つの意味的關係によって分類されてきた語彙的複合語が2つに分類され、それが形態構造の違いによって説明されるとしている。

#### 1.5. まとめ

本節では、日本語の複合動詞の分類について先行研究をまとめた。寺村 (1984) により、複合動詞はそれを構成する2つの動詞の意味的、統語的役割によって4つに分類されることが示され、影山 (1993) の提案により、日本語の複合動詞は大きく分けて2つ (統語的複合語、語彙的複合語) に分類され、さらに影山 (2013) によって、複合動詞の大半を占める語彙的複合語は、前項動詞と後項動詞の意味的關係による分

類（松本 (1998) 等）より一般性の高い2つの分類である規範的複合動詞と L-asp 複合動詞に分類できることが示された。ここで重要なのは、影山 (2013) が主張するように統語的複合動詞のみならず、語彙的複合動詞にもアスペクトの意味を持つものが存在する点である。つまり、日本語では統語的または語彙的にアスペクト的性質を持つ形態要素が後項動詞として生じ、それが前項動詞と結合して一つの述語を形成することができる点である。この点が、後述する韓国語、英語の複合動詞にはみられない特徴であると思われる。

次節では、観察の対象を日本語から韓国語に移して、複合動詞の成り立ちを考察する。

## 2. 韓国語の複合動詞

本節では、先行研究（生越 (1984)、塚本 (2009, 2013)、徐 (2010) など）を概観しながら、韓国語の複合動詞を日本語の複合動詞と対照する。

生越 (1984) は、韓国語母語話者への日本語教育の際に誤用が生じやすいものとして、以下のような日本語と韓国語の複合動詞形成の違いを挙げている。

- (11) a. 彼らは愛し合っている。  
 b. 그들은 서로 사랑하고 있다
- (12) a. こんなにたくさんのは一生かかっても読み切れない。  
 b. 이렇게 많은 평생 동안 걸려로 다 읽을 수 없다
- (13) a. 有名な小説を戯曲に書き直した。  
 b. 유명한 소설을 희곡으로 고쳐 썼다 (生越 (1984): 55)

(11a) の「愛し合っている」は日本語では複合動詞で表すが、韓国語では「愛し」(사랑하) という単一の動詞に「お互い」(서로) という副詞が生じて日本語と同じような意味を表している。また、(12b) では、日本語の「読み切れない」は韓国語では複合動詞ではなく、「全部読めない」(다 읽을 수 없다) のように、複合動詞とはならない。さらに、(13b) の「書き直す」は韓国語では、「直して書く」(고쳐 썼) のように日本語と韓国語では前項と後項が入れ替わっている。このように、日本語と韓国語では複合動詞の分布が異なることがわかる。

徐 (2010) は、前節でみた寺村 (1984) の前項、後項要素の統語的、意味的独立性の観点から韓国語の複合動詞について分類を試みている。

まず、前項、後項ともに単一動詞として使われる際の意味を保持している場合、以下のように日本語と同様に複合動詞を生じることができる。

- (14) a. 手持ちの株を銀行に売り渡した。  
 b. 가지고 있는 주식을 은행에 팔아넘겼다

- (15) a. 生徒たちは黒板の問題をノートに書き写した。  
b. 학생들은 칠판의 문제를 노트에 베껴 썼다 (写し-書いた<sup>1</sup>) (徐 (2010) : 20)

しかし、以下のようにどちらかの要素が独立的な意味を保持しない場合、保持できない方の動詞は、韓国語では動詞として言語化されないか、動詞以外の他の要素として生じる。

- (16) a. 給与から税金を差し引くと手取り収入になる。  
b. 급여에서 세금을 빼면 실수입이 된다  
(17) a. 僕は一晩でその小説を読み上げた。  
b. 나는 하룻밤에 그 소설을 다 읽었다 (全部-読んだ) (徐 (2010) : 21-22)

(16)では、日本語の「差し引く」の後項要素「引く」は、韓国語でも複合動詞内に生じている(빼다)が、「差す」の部分は生じていない。前項要素の「差す」は「税金を差す」とはいえず、本動詞としての統語的、意味的独立性を複合動詞「差し引く」の「差す」は保持しない。(17)は(16)と逆で、日本語の「読み上げる」では、後項要素「上げる」は統語的、意味的独自性を保持していなため、韓国語では複合動詞としては生じておらず、独立性を保持している「読む」(읽다)だけが生じている。

さらに、日本語の「引き立つ」のようにどちらも本来的な意味を保持しない場合、韓国語では、日本語と異なる表現の仕方をする。

- (18) a. 額縁を変えたら、絵が一段と引き立った。  
b. 액자를 바꿨더니 그림이 한층 돋보였다 <高々と-見えた>  
(19) a. 下宿が見つかって、やっとそこに落ち着いた。  
b. 하숙집이 구해져서 겨우 거기에 자리잡았다 <場所-取った>  
(徐 (2010) : 23)

日本語では複合動詞として表される「引き立つ」「落ち着く」は、前項、後項がどちらも単独で使われる際の本質的な意味を複合語内部で保持していない。これらに対応する韓国語の例では複合動詞として生じることができず、また、主動詞も(表す意味はほぼ同じだか)異なる動詞が生じていることがわかる。

徐 (2010) は、さらに、韓国語、日本語の両言語で複合動詞として生じるが、前項、後項に生じる動詞が異なるものとして以下のような例を挙げている。

- (20) a. 倉に隠れている犯人を引っ張り出す。

<sup>1</sup> 本論では、(15b)のように日本語と韓国語で前項、後項の順がなぜ逆になるのかについて深く議論せず、動詞を連結することで複合動詞が形成できるかの観点のみに注目することとする。



- b. 광에 숨어 있는 범인을 끌어내다 <引き-出す>  
 (21) a. 両目からは二筋の涙がぼろり流れ落ちた。  
 b. 두눈에서는 두줄기의 눈물이 주르르 흘러내렸다 <流れ-降った>  
 (22) a. 弟は長靴（靴）を履くために一晩中歩き回る。  
 b. 아우는 장화（신발）를 신기 위해서 밤새껏 돌아다닌다 <回り-通う>  
 (徐 (2010) : 25-26)

これらの例で重要なのは、上記の韓国語の複合動詞を形成している前項、後項動詞は、単独で使われる際と同じ意味的、統語的独立性を保持している点である。このことから、韓国語では、複合動詞を形成することができるか否かは、動詞としての自立性を保持している、つまり、寺村 (1984) の分類による (4a) のタイプに限られることが、徐 (2010) の観察から明らかにされた。

塚本 (2009) は、影山 (1993) の複合動詞の統語的か語彙的かの 2 つの分類の観点から韓国語の複合動詞について観察している。

まず、以下のように日本語の統語的複合語として分類されるものに対応するものは、韓国語では複合動詞として生じないことを観察している。

- (23) a. 벨가なり終わった。  
 b. 종 소리가 끝났다 (直訳：鐘の音が終わった。)  
 (24) a. 父がビールを飲み続けた。  
 b. 아버기기 맥주를 계속 먹었다  
 (直訳：父がビールを継続 [= 続けて] 飲んだ)  
 (25) a. 桜の花が咲き始めた。  
 b. 벚꽃이 피기 시작하였다 (直訳：桜の花が咲くこと (を) 始めた)  
 (塚本 (2009):326-327)

次に、日本語では、後項が様態を表すものが多くみられるが、韓国語では、このようなものは非常にまれであり、日本語と同様の意味内容を表すためには複合動詞以外の手段で表すことを観察している。

- (26) a. Чoлcはご飯を食べ過ぎた。  
 b. 철수는 밥을 지나치게 먹었다  
 (直訳：Чoлcはご飯を過ぎるように食べた。)  
 (27) a. 友達は書類を出し間違えた。  
 b. 친구는 서류를 잘못 내었다  
 (直訳：友達は書類を間違えて出した。)  
 (28) a. 太郎は次郎と殴り合った。  
 b. 다로오는 지로오하고 서로 때렸다

(直訳：太郎は次郎と互いに殴った。)

(29) a. 師匠は弟子に芸を教え込んだ。

b. 선생님은 제자에게 기술을 { 잘 / 세심히 } 가르쳤다

(直訳：師匠は弟子に芸をしっかりと教えた。)

(塚本 (2009): 328)

また、日本語では語彙的複合動詞として成立しないにも関わらず、韓国語では成立するものがあることを指摘している。例えば、「구워먹다 (焼いて食べる)、끓여마다 (沸かして飲む)、실어보내다 (積んで送る) (塚本 (2009): 319)」などは日本語では前項が動詞のテ形で生じるのに対して、韓国語では、複合動詞として生じることができる。

このように塚本 (2009) では、影山 (1993) の日本語の複合動詞の分類をもとに韓国語の複合動詞を分類した。その結果、韓国語では統語的複合動詞は成り立たず、語彙的複合動詞の一部のみが生成可能であることが示された。塚本 (2009) の分析により、影山の枠組みで韓国語の複合動詞の形成が説明できることが示されたことで影山 (1993) の分類の妥当性とこの分類の普遍性が示された。

塚本 (2013) は、影山 (1993) の分析を修正した影山 (2013) の枠組みに従って、塚本 (2009) の分析を修正している。前述のように、影山 (2013) は意味的主要部の観点から語彙的複合動詞を2つのタイプに分割しているが、塚本 (2013) は、韓国語ではこのうち、前項動詞が後項動詞の手段、方法、原因などの意味を表して、前項が後項を補足する働きをもつ主題関係複合語<sup>2</sup>と呼ばれるものは、韓国語でも複合動詞として成立するが、後項動詞が前項動詞の意味を補足し、広義のアスペクト性を示すアスペクト複合動詞 (例えば、비벼끄다 (= 「もみ消す」)、때려죽이다 (= 殴り殺す) 불러세우다 (= 呼び止める) (塚本 (2013): 223) については日本語では生産性が高いが、韓国語では限定的なものに限られ複合動詞として出現することができないと分析している。そして、韓国語では複合動詞として出現することができるのは、(i) 前項・後項ともに自立語であり、(ii) 前項が後項の手段、方法、原因などの意味を表し、後項の表す事態を前項が補足的に説明する時であると結論づけている。

崔 (2016) は、塚本 (2013) を検証し、韓国語にもアスペクト複合動詞が存在する可能性を指摘している。そして、以下の表のように日本語と韓国語の複合動詞の分布をまとめている。

<sup>2</sup> 塚本 (2013) は、影山 (2012) で使われた名称を使用して議論しているため、本稿が1.3節で述べた影山 (2013) の複合動詞の名称とは異なっている。この節で「主題関係複合動詞」と呼ぶものは1.3節で「規範的複合動詞」と呼んだもので、また、「アスペクト複合動詞」と呼ぶものは「L-asp 複合動詞」と呼んだものである。本稿では、以降、塚本 (2013) の用語を踏襲して、「主題関係複合動詞」と「アスペクト複合動詞」の2つの名称を用いて議論を進めることとする。

(30) 日本語と韓国語の複合動詞の種類

	統語的複合動詞	語彙的複合動詞	
		主題関係複合動詞	アスペクト複合動詞
日本語	○	○	○
韓国語	×	○	× (→?)

(崔 (2016): 表 1 を一部改変)

崔 (2016) が指摘する韓国語の語彙的複合動詞のうち、アスペクト複合動詞の存在の可能性については本稿では詳細に議論しない。上の表のように日本語と韓国語のどちらも主題関係複合動詞については形成可能であるが、統語的複合語、アスペクト複合動詞の 2 つは、韓国語では生成されない。影山 (1993) が主張するように統語的複合動詞の後項にはアスペクトを担う要素(「始める」、「続ける」など)が生じることから、韓国語において複合動詞の後項に生じることのできない要素は、アスペクト的意味を持った要素であると一般化できると思われる。つまり、日本語、韓国語の違いは、主動詞にアスペクト的意味を持つ要素を複合できるか否かの違いであると分析できる。

次節では、英語の複合動詞について概説する。

3. 英語の複合動詞

本節では、英語の複合動詞について観察する。英語では、日本語と同じような複合動詞として freeze-dry のようないくつかの動詞が指摘されているが、いずれもハイフンで結ばれ、その形成のされ方は日本語とは性質が異なる。

また、英語の口語表現では come see, go visit などのように動詞を 2 つ連結する複合語が存在するとされている (cf. Carden and Pesetsky (1977)、Pullum (1990) 等) が、これらは以下のように命令を表わす文で使われるものが多い。

- (31) a. Come fly with me.  
 b. Come see about me.  
 c. Go tell it on the mountain.  
 d. Go stick your head in a pig. (Pullum 1990: 218)

Pullum (1990) はこのような動詞を 2 つつなげる構文を go get construction (以下、go get 構文と呼ぶ) と名付け、その振る舞いを観察している。この構文は、命令形だけではなく、以下のように仮定節や不定詞、助動詞の補部で生じることができる。

- (32) a. Her supervisor demanded that she go buy a replacement.  
 b. I want to go take a nap.

- c. Birds will come play in your birdbath. (Bjorkman (2010): 16)

しかし、この構文が文法的になるのは、動詞が形態的な変化をせず、原形として用いられる場合で、(33b-d)のように、主語が3人称単数で現在を表す文や過去、完了、進行の出来事を表す文などで動詞が形態的に変化するときには文法的な go get 構文が形成されない。

- (33) a. I/you/we/they go get the paper every morning.  
b. \*He/she goes gets the paper every morning.  
c. \*The delivery person came left the package on the porch  
d. \*He has gone bought the newspaper already.  
e. \*Susan is coming having lunch with us. (Bjorkman (2010): 16)

興味深いことに、(33b)を疑問文、否定文で用いた(34)の文では、助動詞の do が人称と時制を担い、動詞が原形として生じることができるようになると容認されることが指摘されている。

- (34) a. Does she go get a coffee every morning?  
b. She doesn't go get a coffee every morning. (Bjorkman (2010): 16)

日本語や韓国語では複合動詞の後項要素が時制やアスペクトを担うことができることから、go get 構文に見られる英語の動詞連鎖は日本語や韓国語と同様な性質を持たないといえる。このことから英語では基本的には動詞を2つ並べて1つの事態を表すことができないといえる。

由本(2005)は、日本語の複合動詞と同じような事態を英語では以下のように句動詞(Phrasal verb)で表すとしている。

- (35) a. He cut the tree down. (「切り倒す」)  
b. She pushed the window open. (「押し開ける」)  
c. She cried her eyes out. (「泣きはらす」)  
d. They talked the night away. (「語り明かす」)  
e. He used up all his energy. (「使い果たす」) (由本(2005):100)

上記の例を観察すると(35b)の文では「開ける」という動詞が open という形容詞で生じている。そして、この形容詞が push the window という前項動詞とその内項が表す出来事によって生じる事態の結果状態を表している。それ以外の文では日本語の後項要素に当たるものが副詞的に用いられる前置詞で生じ、それが前項動詞が表す事態の結果として生じる状態を表している。このことから、(35b)は典型的な結果構文、それ

以外の例は Washio (1997) が見せかけの結果構文 (= spurious resultatives) と呼ぶ例である。このような例から、日本語で複合動詞を形成して表わす意味内容は、英語では複合動詞以外の方法（主動詞や結果句）で表わすことが分かる。その一方で、英語の go get 構文のような一見、複合動詞のようにみえるものは、2つの出来事の連続性が保証された特殊な状況のみに生じる一種の慣用的な表現であると分析できる。

#### 4. 考察

ここまで、日本語と韓国語、そして英語の複合動詞について観察してきた。日本語はかなり自由に複合動詞の形成が可能であるが、韓国語では語彙的複合語のうち、アスペクト複合動詞を除いたもののみが許され、英語では口語的な一部の表現を除いて複合動詞が存在しないことが明らかとなった。このような言語差が生じるのはなぜなのであろうか。本節では、形態統語論の立場からこのような言語的な差を生み出すメカニズムについて考察する。本稿の提案を提示する前に、塚本 (2009、2013) が主張する日本語と韓国語の複合動詞形成についての言語差についての提案を検討する。

塚本 (2009、2013) は、日本語と韓国語の複合動詞形成の言語的な違いは、両言語が持つ「形態・統語的な仕組みの違い」(塚本 (2013): 316) から生じるとして、両言語をそれぞれ以下のように特徴づけている。

- (36) a. 日本語—語と節・文と重なって融合している性質のものが存在する仕組みになっている。
- b. 朝鮮語—語なら語、節・文なら節・文といったように、基本的には語と節・文の地位を区別する仕組みになっている。(塚本 (2013): 316)

塚本は、日本語では語と節・文が溶け合って、1つの述部で表しうることによって語彙的アスペクト動詞のような前項が意味的主要部で後項がアスペクト的事態を表す複合動詞が形成できるとしている。一方、韓国語においては、日本語のような語と節・文とが融合することが根本的に不可能であることからアスペクト複合動詞が形成できないと主張している。

日本語と韓国語の複合動詞の事実で重要なのは、塚本 (2013) が指摘するように、(i) 日本語では、複合する2つの動詞が共に自立語であれば複合動詞が生成し、また、統語的な自立性に欠けるが意味的には動詞としての機能を果たす付属語の場合でも、複合動詞が形成されること、(ii) 日本語では複合動詞の後項要素がアスペクト的要素を持つ統語的複合動詞と語彙的複合動詞のうちアスペクト複合動詞の2つが、語彙的複合動詞の主題関係複合語と合わせて形成可能であるが、韓国語では後項がアスペクト要素である上記2つの複合動詞は形成できず、前項が後項の補足的な機能を持つ主題関係複合動詞のみが形成可能であることである。このことから、日本語と韓国語では、後項要素にアスペクト的要素をもつ動詞を主動作を表わす動詞に複合できるか否かの

違いであると分析できる。このことから本稿では、塚本 (2009, 2013) の分析を認めながらも、アスペクト的性質を示す形態要素がどのように言語的に具現化するのかに注目して、英語を含めた3つの言語について動詞のアスペクト事態をどのように標示するか観点から複合動詞の分析を試み、それぞれの言語における複合動詞の生成可否についての理論を形態統語論の立場から考察する。

以下のように、3つの言語で主動詞とアスペクト要素 (Asp で示し、これは語彙的アスペクトと影山 (2013) のいう L-Asp を含めていう。) がどのように表示されるかまとめる。

(37) 日本語：[V V-ASP ]

アスペクト要素が動詞として現れることができ、それが主動詞に直接複合され、複合動詞を形成することが可能。

韓国語：[VP ASP V ]

アスペクト要素は動詞として現れることができず、主動詞を意味的に修飾する要素として生じる。

英語：[FP [ AspV ](to) V(-ing) ]

アスペクトを表す要素が動詞として生じ、それが主動詞となって、実際に事態を表す動詞が従属する。

これらの3つの言語では、語彙的アスペクトがどのように形態的具現化するのかに言語的な違いがみられ、特に、主動詞が語彙的アスペクトを取り込み、2つが一体となって1つの動詞を形成することを可能とする形態統語的プロセスが個別言語に備わっているか否かが言語差を生み出していると分析する。

日本語の場合、このような形態統語的プロセスが備わっているため、語彙的アスペクトを示す後項動詞を主動詞となる前項動詞に複合させる統語的複合動詞と L-Asp を後項動詞として生じる語彙的複合動詞の一種であるアスペクト複合動詞を生じることができる。日本語がこのような形態統語的なプロセスを有していることで、比較的自由に複合動詞が生成されると考えられる。

一方、韓国語は、(38) のような日本語の「ている」「である」に相当する文法的なアスペクトは日本語と同様に統語的に結合できるが、語彙的なアスペクトは、統語、語彙の両部門のどちらでも形態統語的なプロセスにより結合されない。

- (38) a. ~있다 <issta> (いる；ある) = ~ている  
       ~계시다 <kyeysita> (いらっしゃる) = ~ていらっしゃる  
   b. ~버리다 <pelita> (捨てる) = ~てしまう  
   c. ~가다 <kata> (行く) = ~ていく  
       ~오다 <ota> (来る) = ~てくる

d. 학생이 의자에 앉아 있다

(学生が椅子に座っている。)

(塚本 (2009): 329)

韓国語では、後項要素が語彙的アスペクトではなく、自立語であれば日本語と同様に語彙的複合動詞の形成が可能であること (cf. 徐 (2001), 塚本 (2009)) から、語彙部門では2つの自立的な動詞が語彙的に結びつき、1つの動詞を形成する形態プロセスは有していると考えられる。2つの自立語である動詞の結びつきが自然であると見なされれば、2つの動詞が表す事態が一体化して、1つの複合動詞が形成される。一方、韓国語には、語彙的アスペクトを主動詞に取り込む形態統語的なプロセスがないため、語彙的アスペクトが示す意味的内容を表すのであれば、(23)-(29)のように修飾要素として文に生じたり、別の言語表現を用いて表すことが必要になる。このことで、日本語よりも複合動詞の形成が制限されると分析される。

また、英語では、日本語の統語的複合動詞と同じ意味を表すものは、begin, continueのように時制を担う主動詞として生じ、それが主動作を表しアスペクトを位置付けられる動詞を不定詞句や動名詞句として補部を選択する。つまり、語彙的アスペクトは日本語と同じように動詞として具現化するが、それが単独の動詞として生じ、また、主動詞とそれが選択する句が構成素をなすことができず、日本語の統語的複合動詞と振る舞いが異なっている。また、英語でも3節で述べたように go see や go get のように前項動詞に移動を表す動詞が生じ、その移動の先で行う行為を表す動詞を後項に生じる動詞の連鎖が可能であるが、このような表現は前項の動作の後に自然に起こりうる動作を後項動詞として生じさせている特殊な結合であり、日本語や韓国語の複合動詞とは異なるものである。しかし、このような表現が英語でも許されることから、普遍的には2つの動詞を複合させることは可能であると推察される。しかし、普遍的な動詞の結びつきには、各言語の持つ語彙的アスペクトを主動詞に結びつける形態統語的プロセスの違いによって、それぞれの言語でどのような複合動詞が生成可能かが決まると分析する。

本稿では、複合動詞の生成可否について、日本語、韓国語、英語の3つの言語を観察し、それぞれの言語で複合可能な動詞の組み合わせに違いがあることを先行研究からまとめた。本稿では特に、後項が語彙的アスペクトを表す要素が生じる際に、言語的な違いがあることに注目して、主動詞と語彙的アスペクトを表す要素との形態統語的プロセスの個別的特徴の違いから複合動詞生成可否の言語差が生じることを主張した。

今後の課題として、(i) 本稿で提案した形態統語論的プロセスが具体的にどの言語部門に位置付けられるものなのか検討すること、(ii) 動詞以外の他の品詞からなる複合語についても同様な個別言語の形態統語論的プロセスが当てはまるのか、(iii) 日、韓、英以外の言語でも本稿の提案が検証できるか否かについて、考察することが必要であると思われる。

(参照文献)

- Bjorkman, K. Bronwyn. (2010) Go get, come see. *University of British Columbia Working Paper Linguistics 25 (Proceedings of NWLC 2009)*, 15-28.
- Carden, Guy and David Pesetsky. (1977) Double-verb constructions, markedness, and a fake co-ordination. *CLS* 13, 82-92.
- 影山太郎 (1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎 (2012)「レキシコンと文法・意味：複合動詞研究のこれから」関西言語学会第37回大会シンポジウム「日本語レキシコン研究の最前線」における口頭発表 於甲南女子大学
- 影山太郎 (2013)「語彙的な複合動詞と補助動詞」『レキシコンフォーラム』No. 6, 285-301. ひつじ書房
- 松本曜 (1998)「日本語の語彙的複合動詞にける動詞の組み合わせ」『言語研究』114, 37-38. 日本言語学会
- 生越直樹 (1984)「日本語複合動詞後項と朝鮮語副詞・副詞的な語句との関係－日本語副詞指導の問題点」『日本語教育』52号, 55-64. 日本語教育学会
- Pullum, K. Geoffrey. (1990) Construction on intransitive quasi-serial verb constructions in modern colloquial English. *Ohio University of Working Paper in Linguistics* 39, 218-239.
- 崔正熙 (2016)「日本語から見た韓国語の複合動詞、韓国語から見た日本語の複合動詞－韓国語のアスペクト複合動詞の存在可能性をめぐって」(発表資料) Morphology & Lexicon Forum 2016 (於 慶応大学日吉キャンパス)
- 徐 民靜 (2010)「日本語と韓国語における複合動詞の語彙的対照研究」『日本言語文化研究』第14号, 19-32. 龍谷大学
- 寺村秀夫 (1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 塚本秀樹 (2009)「日本語と朝鮮語における複合動詞再考－対照言語学からのアプローチ」『朝鮮半島のことばと社会－油谷幸利先生還暦記念論文集』313-341. 明石書店
- 塚本秀樹 (2013)「日本語と朝鮮語における複合動詞としての成立・不成立とその様相－新影山説に基づく考察－」影山太郎 (編)『複合動詞研究の最先端－謎の解明に向けて』301-329. ひつじ書房
- 由本陽子 (2005)『複合動詞・派生動詞の意味と統語』ひつじ書房
- Whasio, Ruichi. (1997) Resultative, Compositionality and Language Variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6, 1-49.